

令和7年度「全国学力・学習状況調査」の結果 －分析から見てきた成果・課題と今後の取組について－

区 名 鶴見区

学 校 名 鶴見南小学校

学校長名 井上 伸一

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和7年4月17日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数・理科）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数
- ・理科

(2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・鶴見南小学校では、第6学年 111名

令和7年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

平均正答率について、国語科では、全国平均より4.2㊦、大阪府平均より6㊦上回った。全項目において大阪府・全国平均を上回る結果となった。算数科においても大阪府・全国平均より5ポイント上回った。領域別に見ても大阪府・全国平均を上回っている。理科においては大阪府平均を2ポイント上回り、全国平均と同等の結果となった。領域別に見ると、A区分「粒子」を柱とする領域において大阪府より1ポイント、全国より2ポイント下回っている。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕

全項目において大阪府・全国平均を上回る結果となった。前年度、全国平均を下回った「（2）情報の扱い方に関する事項」においても、5㊦以上上回っている。このことより、情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し、使うことができつつあることがわかる。一方で、記述式の問題においては、大阪府や全国平均と比べて無解答率が高くなっている項目も見受けられた。そのため、目的や意図に応じて書いたり、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫したりする力の育成が必要である。

〔算数〕

全項目において全国・大阪府平均を上回る結果となった。昨年度全国平均を下回ったB領域（図形）においても約4ポイント上回る結果となっている。しかしA領域（数と計算）において数直線上に表された分数を答える問題で、誤答や無回答率が高いものがあつた。必要な情報を選び数量の関係を式に表すことや、数や言葉を使って説明をすることなど、自分の考えについて式や言葉を使って表す力を育てる必要がある。

〔理科〕

全体として全国平均と大きな差はない。「学習指導要領の内容」のB区分「生命」を柱とする領域のみ全国平均は52％に対して、本校は59％と上回っている。その他の領域に関しては全国平均より下回っている。特に、金属の性質を問われる知識の問題は正答率8％、レタスの発芽の条件について、差異点や共通点を基に新たな問題点を見だし、表現することを問われる問題の正答率は31％と低い。このことより、まず基礎的な知識を定着させた後、自分の考えを表現する力を身に着ける必要があると考える。

国語に関する全ての設問において、肯定的に回答した児童の割合が、大阪府および全国の平均を10%以上、上回っていた。このことから、児童は国語の学習に対して自信をもち、将来役に立つことを意識しながら主体的に取り組んでいることがわかる。算数に関する設問においては、「得意・好き」だと答える児童の割合は半数近くに留まっている一方で、「授業が分かる」「社会に出て役立つ・生活で活用」には肯定的に答える児童の割合が多い。将来役立つと考えていながらも、学習自体を楽しめていない実態がわかる。「理科の勉強は得意ですか」の問いに対し、肯定的な回答が全国平均は77%に対して、本校は62%と低い。また、「理科の勉強は好きですか」の問いに対しても、肯定的な回答は全国平均が79%に対し、本校は65%と下回っている。このことから、本校の児童は理科の学習に対して、苦手意識を持っている児童の割合が多くいることがわかる。しかし、「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たとき役立つと思いますか」の問いに対しては、80%の児童が肯定的な回答をしていることから、理科の学習の必要性や実生活との結びつきを理解している児童が多くいることがわかる。

今後の取組(アクションプラン)

〔国語〕

記述式の問題で無解答の割合が高くなっている項目が見られた。本や新聞など複数の資料を活用しながら、調べたり考えたりしたことを報告する言語活動に取り組むことで、文章と図表を結び付けながら必要な情報を見つけたり、論の進め方を捉えたりする力の育成を目指す。

〔算数〕

昨年度と比較すると無回答の割合が少なくなっている。特に記述式においては昨年度、大阪府・全国平均を下回っていたが、今年度は上回る結果となった。しかし必要な情報を読み取ることについて誤答・無回答が見られるので、課題から情報を見つけたり読み取ったりする活動を取り入れる。

〔理科〕

「理科の授業では、観察や実験をよく行っていますか」の問いには、全国平均が91%に対して、本校は87%である。今後児童らが、様々な事象に対して見て・聞いて・体感できるような授業展開を取り入れ、理科に対するプラス思考を醸成していく。